

宗教心理学研究会ニューズレター

第21号 2015.2.15

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

第12回研究発表会報告	報告 木村 健	1
日本心理学会第78回大会公募シンポジウム報告		
宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連(2)	報告 酒井克也	11
日本心理学会第78回大会公募シンポジウム「宗教心理学的研究の展開(12)」		
「宗教心理学とできること」に参加して	岡田正彦	15
戻ってきたつもりが、共にいた！－日本心理学会シンポジウムに参加して－	安藤泰至	18
研究会企画シンポジウム(第12回研究発表会)参加からの収穫	松田茶茶	19
科研費企画シンポジウムをめぐる雑感	浦田 悠	20
質的研究班の研究背景とその概要－多様な意味づけに迫るために－	川島大輔	22
宗教的事象と人間の心的活動の関連だけで事足りるか？		
「人間の救済」を志向する宗教心理学の提案	中尾将大	23
実証的研究への期待と可能性	平子泰弘	25
「日本心理学会第78回大会公募シンポジウム 宗教心理学的研究の展開(12)」		
「宗教心理学とできること」に参加して	森定美也子	26
日本心理学会第78回大会における宗教心理学研究会企画		
のシンポジウムに参加して	小泉晋一	27
これからの宗教心理学の可能性	武田正文	28
事務局からのお知らせ		30

第 12 回研究発表会報告

日本心理学会第 78 回大会公募シンポジウム:宗教心理学的研究の展開(12)

「宗教心理学とできること」

報告 木村 健(特定非営利活動法人 ratik)

2014 年、同志社大学で開催された日本心理学会第 78 回大会の第 2 日目・9 月 11 日(木)に、公募シンポジウムの 1 つとして「宗教心理学的研究の展開(12)」宗教心理学とできること

」が開かれました。

問い

以前から、日本人の精神性・メンタリティを取り

上げる言説は繰り返されてきました。また昨今、長引く不況と「オウム以降」の揺り戻しもあり、精神性・メンタリティの基底をなす宗教性・スピリチュアリティに注目が集まるケースが増えていました。さらには、東日本大震災後には、被災地における宗教家の役割がテーマ化されるなど、「私たち」の心を支えるものに対する関心が高まっています。

宗教性・スピリチュアリティを問うことは「宗教心理学」の大きな役割です。他方、この広大な領野は、ただ「宗教心理学」のみでカバーし尽くせるものではありません。「私たち」の心の在り処を明らかにし、未来に向けた指針を描いていく上で、様々な学問領域との連携・協働は「今まさに、この新たな局面において不可欠である」という問題意識のもと、シンポジウムが企画されました。

今回、招集を受けたのは「精神保健福祉」「生命倫理」「死生学」「出版」をバックボーンにする論客、投げ掛けられた「問い」は「宗教心理学に期待することは何か」「宗教心理学と協働できることは何か」でした。宗教学と心理学の両方に軸足を載せ、幅広く事象を睨む森岡正芳さんを指定討論者に迎え、シンポジウムがスタートしました。

閑散

参加者は、企画・司会者、話題提供者、指定討論者を合わせて 20 名程度だったでしょうか。この数値は、最近の宗教心理学研究会関連の大きな催しの中では「低調」の部類に入ってしまうのかもしれませんが。

潜在的聴講者にアピールできなかった外的要因としては、(a)大会自体が集客的に不利な「関西」開催であったこと(国内研究者人口の東京集中は否めないと思います)、(b)「朝一番」の時間帯の開催であったこと、(c)同じ時間帯に海外有力研究者による「招待講演」、学会企画である「公開シンポジウム」など「大会の目玉」が配置されていたこと、(d)同じ時間帯に昨今の心理学界隈におけるホットな「キーワード」を冠したシンポジウムが複数開催されていたこと、(e)出入口が発表者脇の 1 箇所限定される教室であり、中途入室者を拒む建築構造であったことなどが挙

げられます。

内容面に魅力が欠けていたのだとすれば、話題提供者の 1 人として、強く責任を感じます。ただ、対外的に、企画に対する「既視感」を持たれてしまった可能性については、検討の余地があるのかもしれませんが(研究会内部での「或る意味での関心の低さ」については、どのようにコメントをして良いのか、私には適切な言葉が見つかりません...)。

外延と内包

私たち宗教心理学研究会の活動を見ても明らかなおと、国内の「宗教心理学」には、特定のディシプリンに則った研究・実践コミュニティが形成されている訳ではありません。むしろ、実に多様なバックボーンを有した個々の研究者・実践家が幾ばくかの家族的類似性を呈しながら「宗教心理学的研究の展開」が図られてきた側面は、強くあるのではないのでしょうか。さらに、研究会としても、過去からの様々な議論の場を通して、こうした「緩やかな繋がり」を肯定的に評価することへの合意が醸成されてきたのだとも思います。

今回のシンポジウムの発起段階において、企画者・松島公望さんからは「一足飛びに手を広げるのではなく、まずは地道に近接したところから連携・協働の道を探る」といった主旨をお聞きした記憶があります。この道は、とても真つ当な選択であると思います。

他方、私を除く話題提供者、岡田正彦さん・安藤泰至さん・松田茶茶さんは、いずれもが「宗教性・スピリチュアリティに関わる人間の心」を扱う／扱わざるを得ない立場でお仕事を続けておられます。彼／彼女らの活動は、ご本人がどのように自らを名乗ろうとも、先の「緩やかな繋がり」の文脈では「宗教心理学そのもの」なのではないでしょうか。

宗教心理学研究会としては、今回のシンポジウムで、より広い展開の可能性の探求を意図しながらも(内包)、対外的には、それが「従来からの宗教心理学の枠内の研究発表」に見えてしまった(外延)可能性はなかったでしょうか(もちろん、宗教心理学の研究発表に意味が無い、と言

いたい訳ではありません)。

私は何者であり、宗教心理学とは何であるのか

1つの解釈として、企画者が「宗教心理学」とできることは何か、と問う時、そこには「宗教心理学」である自らと「その他の研究・実践の営み」を分かち定義が暗黙に前提されているように思います。また、その問いに応じて、自らの活動領域を「精神保健福祉」「生命倫理」「死生学」と名乗る時、各話題提供者にとっては「自らの外部に存在する宗教心理学」の定義が隠されているのではないのでしょうか。

しかし、「宗教心理学」についての概念規定を議論するのは、もはや生産的ではありません。むしろ今や、私たちは、話題提供に立った研究者・実践家が、どのような「宗教性・スピリチュアリティに関わる人間の心」に出会い、それらとの格闘の過程において、より広範に取り組むべきものとして、どのような課題を見出しているのかを、詳らかに吟味していける共通の土俵に立っているのだと思います。

以下、こうした視点から、提供された話題を振り返っていきましょう。

1. 「精神保健福祉の臨床現場で宗教心理学とできること」岡田正彦さん

〔実学を支える虚学としての宗教心理学〕

岡田さんは、第5回研究発表会(日本心理学会第71回大会)の折に「宗教心理学専攻者の実践の一例」という形で話題提供をされていました(ニューズレター第8号参照)。今回、企画者からのテーマ打診を機に、自らの「立場性」の把握において、当時との違いが生じてきていることへの「気づき」がもたらされた体験が、まず語られました。

岡田さんは、サリバンとヘレン・ケラーに興味をひかれ、「社会福祉」あるいは「社会福祉学」というところから学術的キャリアを開始されました。初期には「サリバンのような教育者になりたい」といった夢も抱いておられたそうです。しかし、ヘレン・ケラー40代の著書『私の宗教』の中で絶賛されるスウェーデンボルグに強い関心をもち、「宗教

学的宗教心理学」へと軸足を移していかれました。ただ、岡田さんが師事されていた小野泰博先生が、どちらかと言えばフロイト、ユングらに代表される臨床寄りの守備範囲をお持ちだったこともあり、精神科病院の臨床現場に入職され、現在に至っています。

2007年当時、岡田さんの捉えでは「社会福祉学」から「宗教心理学」への移行は「転向」とみなされていました。しかし、今改めて振り返ると、岡田さん個人の中で「社会福祉学」と「宗教心理学」との連携・協働が実現し、それを元にして現在までの臨床現場での実践が在ると捉えることができるというのです。しばしば「社会福祉学」は「実学」に分類されます。それを「虚学」としての「宗教心理学」が支えながら、ソーシャル・インクルージョンまでも射程にした今日の実践が展開されているという岡田さんの「立場性」が把握できるのです。

ここで岡田さんが言う「宗教学的宗教心理学」とは「スウェーデンボルグの世界観とは、どのようなものであったのか」「また、そうした世界観を有した人物が、ヘレン・ケラーに、どのように影響を及ぼしていったのか」を明らかにするような学術的営みと言い換えても良いでしょう。また、「現場」から発せられるこうした問いに答えが与えられることで、「社会福祉」の実践には某かの質的变化がもたらされることでしょう。さらに、このケースでは、岡田さん一個人の中で起こった「連携・協働」ではあったのですが、こうした学融の可能性は、「私たち」個人間の営みの中にも普く見て取れるのかもしれませんが。

〔アルコール診療との運命的な出会い〕

岡田さんの臨床現場でのキャリアは、精神衛生法に基づいて設置された歴史ある病院への勤務が決まったことから始まります。平成元年に栃木県内でアルコール依存症を対象にした専門診療がスタート、岡田さんは平成3年、アルコール担当スタッフとして採用され、以降、現在に至るまで20年にも及ぶアルコール臨床での取り組みを続けておられます。当初、ヤスパースによって「妄想型統合失調症」という見解を下されたスウェーデンボルグへの関心が強く、統合失調症患者を

対象にした臨床を志向させていただきに、この「出会い」は今から考えると運命的なものと言えるでしょう。

アルコール依存症は、一度罹ってしまうと「治癒の見込めない病」とみなされています。この病気の本体は、お酒を調節する脳内のプレーキが壊れることであり、本人がいかにも実直で道徳的・倫理的に優れた人物であったとしても、アルコールという物質が一滴でも血液中に入ること、理性は麻痺し、本能に基づく問題行動が繰り返されることになるそうです。このため、現在、多くの場合、(a)通院、(b)抗酒剤、(c)セルフヘルプグループを「三本柱」とする「断酒」が回復への道とされています。

アルコール臨床では伝統的に集団精神療法型のアプローチがとられてきました。そして、その中核を占める先述の「セルフヘルプグループ」の重要な原型となったのが「AA (Alcoholics Anonymous : 無名のアルコール依存症患者たち)」と呼ばれる取り組みでした。今でこそ「病気」という認識が広まっていますが、当時、アルコール依存症患者は、家族から見放され、社会から排除され、頼みの綱である精神科医からも匙を投げられる存在でした。AA は 1935 年、株のプロカーと外科医、2 人のアルコール依存症患者の出会いに端を発します。以降、名前も素性も明かさずに参加できるこの「集まり」は、当時の医療へのアンチテーゼとなったばかりでなく、自分たちの手で回復への道筋を描いていく取り組みのモデルとして、現代の精神科医療の枠組みの中にも位置づけられるまでになっています。

岡田さんがここで「宗教心理学」的に着目するのは、アルコール依存症からの回復のための「プログラム」「ガイドライン」に相当する「AA の 12 のステップ」に散りばめられた次のような言葉です。

- ・自分を越えた大きな力が
- ・自分なりに理解した神の配慮に
- ・神に対し
- ・神に取り除いてもらう準備
- ・謙虚に神に求めた
- ・神の意志を知ること

・私たちは霊的に目覚め

あるいは、グループを健全に維持するための指針である「AA の 12 の伝統」にある次のような言葉にも注意が喚起されました。

- ・愛の神
- ・霊的な基礎

岡田さんによると、病院での「セルフヘルプグループ」のプログラムにおいて、宗教性・スピリチュアリティが強調されることは少ないそうです。しかし、先述の言葉からも明らかとなり、AA の取り組みにおいて、創始者(ビルとボブ)の神秘体験が反映されているのは間違いありません。

岡田さんは「アルコール依存症からの回復」と「ハイヤーパワーを信じる力」との関連を明らかにしていく必要性を唱えておられました。とりわけ「心」にまつわる事象間の関わりや、特定事象の発生メカニズムを解明していくことは「心理学」が得意としてきた事柄です。岡田さんのおっしゃるとおり、こうした局面での「アルコール臨床」と「実証的心理学」との連携・協働は、新たな実践に光りをもたらすのかもしれない。

[広がる臨床の場]

大教大付属池田小学校での事件を機に、平成 17 年、心神喪失者等医療観察法(略称)が制定されました。岡田さんの病院でも医療観察法病棟が建設され、医師、看護師、臨床心理士、精神保健福祉士、作業療法士らからなる手厚い体制の元、運営が図られています。ここでは、「病気」が原因で重大な過失や他害行為をおかしてしまった人に対する再発防止はもとより、社会復帰を目指した医療・臨床的な取り組みが進められています。

再発防止や社会復帰を目指す上で、対象者の「内省」は非常に重要な要素となります。「心理学」的には、こうした内省のあり方と予後の状態との関連をしっかりと把握していく必要があります。さらには「誰も排除しない社会づくり」というソーシャル・インクルージョンの理想の実現を視野に、今回、時間の関係もあり岡田さんからは具体的な道行きが描かれた訳ではありませんでしたが、各種学術領域との連動が求められるのは確かなことでしょう。

2. 「生命倫理から宗教心理学に期待すること、 協働できること」安藤泰至さん

〔従来の生命倫理学の言説を相対化する〕

安藤さんの学術的キャリアの出発点は「宗教哲学」であり、初期の頃には「宗教心理学」と「宗教哲学」とを繋ぐような仕事をされていました。ここでいう「宗教心理学」とは、フロイトやユングを中心とした「深層心理学」「心理療法」であり、これらと「宗教」との関係を解明されていたということです。

安藤さんの「生命倫理」への関わりは、現在ご所属の医学部への赴任以後に始まります。ただ、ご自身は「生命倫理学者」とは名乗らず、むしろ既存の生命倫理学の言説を相対化するなかで、生命倫理にまつわる問題が「私たちにとって、どのような問題なのか」、その本質を考察するお仕事に従事されています。

「生命倫理」という言葉は、「医療倫理」よりも、さらには、より限定的な「臨床倫理」よりも広い領域を指して使われることが多くなっています。また、そこに含まれる問題群には、「マクロ」には、

- ・先端医療技術そのものの本質やその是非をめぐるマクロな議論
- ・先端医療技術をめぐる政策決定に関わる問題群

などが、「ミクロ」には、

- ・倫理的問題が生じる個々の臨床場面における意志決定プロセスや情報提供のあり方
- ・具体的な事例における医療・ケアの実践に関わる問題群

などが含まれます。安藤さんは、これまでマクロ／ミクロな議論が上手く接続されていなかったことへの問題意識を原点にし、新しい生命倫理理論の構築を目指しておられます。

〔生命倫理への宗教の関与〕

マクロな問題群に対する宗教の関わりは、多くの場合、教義・教典に基づいた大上段からの批判的議論に終始し、宗教的信念を共有しない者に対しては何の影響力も与えませんでした。また、ミクロな問題群に対しては、現場において支配的な医学・医療の「専門的」言説に圧され、宗

教者は力のある発言ができませんでした。

安藤さんがこの10年あまりの間に取り組んでこられたのは、医療やケアの具体的な現場に寄り添いながら、医学・医療に特有な物の見方を相対化しつつ、現代の医療システムが私たちに突き付けるマクロな問題を「問い」として取り出すこと、また、そうした問題が、「広い意味での宗教や宗教性」に関わる問いであることを示していくことでした。こうした問題の構造は、医学・医療に関わる多くの事象に見られますが、今回「典型例」として安藤さんがピックアップしたのは「脳死臓器移植問題」でした。

〔「脳死は人の死か」が問われた希有な国〕

1980年代から90年代にかけて、日本では専門家だけでなく一般市民を巻き込んで「脳死は人の死か」という問いを巡る議論が展開されました。安藤さんによると、これは、世界的に見ても珍しい事象だそうです。

他方で、当時、「移植禁止法か」とささやかれたように1997年の臓器移植法成立以降の実施数は微々たる状態が続きました。また、家族の同意だけで臓器摘出を可能にし、実質「脳死＝死」を前提にする改正臓器移植法が強引に制定された後、実施数は増加しましたが、日本では「脳死臓器移植」よりも「生体移植」が数量的にはるかに多い状況が続いています。

日本における脳死臓器移植に対する抵抗の強さは、文化的・社会的要因などによって説明されるかもしれませんが、しかし、ここで安藤さんが注目するのは、「脳死は人の死か」という問いを巡る旺盛な議論が図らずも隠してしまったものです。〔ある人の生命を救うために別の人の生を道具化・手段化すること〕

脳死臓器移植をめぐる倫理的問題の本質は、ある人の生命を救うために、別の人の身体とその生を利用し、傷つけることにあります。この構図は、広い意味での「人体実験」にまつわる問題に似ています。しかし、「人体実験」さらには「生体移植」に比べ「脳死臓器移植」では、「ドナーやその家族」の姿が見えにくくなっています。さらに、一般市民を巻き込んだ先述の議論が、実は、ドナーとなった人の「トータルな生」や、脳死にな

った人とその家族が過ごす「生の最期の時間」を見つめる視界を曇らせてしまったのではないかと安藤さんは指摘します。

〔脳死臓器移植をめぐる宗教的立場からの議論の不在〕

脳死臓器移植問題をめぐり、国内の宗教教団の多くは、反対の立場を明確には表明しませんでした。どちらかという批判的で慎重な議論を展開していました。また、往々にしてそれらの言説には、「脳死」や「臓器移植」に関する知識や、移植を推進する「医療システム」に対する理解が不足していたといえます。さらに、当時、医学内部にも賛否両論があったのに、また、医学自体も文化・社会の一部であるのに「医学的な死」と「文化・社会的な死」とを対置してしまったがために、結果として、脳死臓器移植問題を早々に「医学化」してしまうことに加担してしまいました。あるいは、「他人の臓器をもらってまで生き延びようとするべきでない」という我欲抑制の主張は、「脳死状態になった人まで延命すべきでない」といった言説に容易に反転されてしまいました。

しかし、宗教・宗教家の役割とは本来、人々の苦悩に寄り添うことである筈です。先端医療技術がもたらす「人の生の道具化・手段化」に代表される「新しい生と死の経験」について語ってこなかったことが、宗教・宗教家における最大の問題であったと安藤さんは捉えています。

〔脳死臓器移植医療が生み出すさまざまな「弱者」〕

「脳死臓器移植」というこれまでには存在しなかった「医療システム」は「精神的葛藤」をさまざまな立場の人にもたらします。

例えば、患者にとって「臓器の提供を待つ」ということは、ドナーとなる人の「死を待ち望む」ことに他なりません。また現代のシステムでは、一刻も早く自らが助かるためには、同じように臓器の提供を待つ人々の中で「自分よりも優先度高くリストアップされている人」が先に死ぬことが有利に働きます。

また、近年「深刻化する移植臓器の不足」への対処からか、脳死となった家族の臓器提供に同意することが、悲嘆に対してポジティブな影響が

あるといった言説が形成されています。しかし、残された家族の悲嘆のプロセスが、そんな生易しいものではないことは、話題提供の中で安藤さんが丁寧に紹介された「当時 6 歳の長男の腎臓提供を申し出た父親（小児科医）」の言葉の変遷を見ても明らかでしょう。

さらに、一方で、救命に力を尽くしたり、あるいは、遺される家族とともに看取りの時を過ごしたりする医療者（医師、看護師）にとって、そこに割り込んで来る「臓器提供に向けた身体管理や調整」という仕事が生み出す軋みの大きさは想像に難くありません。

〔宗教心理学の役割〕

安藤さんによれば、宗教は生と死に関わる経験から生じる葛藤を肯定的に受け止め得る力を持っています。最後、短い時間ではありましたが、生命倫理において宗教心理学に期待される役割として、安藤さんからは以下のような事柄が挙げられました。

- ・生命倫理問題において、医学・医療／文化・宗教の二元論的な見方からの脱却は不可欠。
- ・心理学的言説、心理的ケアの政治性についての批判的省察の必要性。同様に「よい死」への誘導についての批判の必要性。
- ・未定義なマジック・ワードとして機能してしまっている「死生観」に関する考察と、外部への提起。

これは私（木村）の理解力不足に起因するところではあるのですが、私の捉えるところの「心理学」さらには「宗教心理学」の「営み」と「学知」に照らしたとき、安藤さんからの「誘い」を、実際にどのような形で個別研究にブレイクダウンしているのか、想像が巡らせませんでした。もしかすれば「私が思い描いている心理学とは、これこれ然々を行う営みなのだが、その上で ... 」といった枕詞で始まる問いかけと擦り合わせが、今後、必要なかもしれません。

安藤さんもおっしゃるとおり、現代の私たちが実際に生死に向き合い寄り添う中で、「宗教性」を含めた「語り」が開かれていくことでしょう。また、そうした経験をミクロに分析する際に、「心」を

扱う宗教心理学は力を発揮し得るでしょう。単なる「手続き」に終始するのではない「いのちへの問い」としての生命倫理の議論が展開されていくことに期待したいと思います。

3. 「死生学から宗教心理学に期待すること、協働できること」松田茶茶さん

〔不可避・普遍的で甚大な問題〕

岡田さん・安藤さんと「医療」に関わる話題提供が続いた後、登壇された松田さんが扱ったのは、死生学、とりわけ「生死をどのように教えるのか」という「教育」に関する主題でした。

多くの辞典類に未だ記述が無い「死生学」は、『臨床心理学辞典』（恩田・伊藤（編），1999，八千代出版）において「死（death）および死にゆく過程（dying）を対象とする研究領域」と定義されています。また、そこではアプローチの可能性として、哲学、宗教学、心理学、精神医学、文学、神学、医学、法律学、看護学などの分野が列挙されています。

こうした死生学の「学際性」については、実際に「死生」「生死」をキーワードにした CiNii での松田さんによる文献検索結果にも如実に表れていました。このことは、「死」が人間にとっての普遍性、不可避性を帯びた大きな問題であり、「生」が真剣な考察に値するからだとして松田さんは考えます。

〔死生と宗教の関係〕

また、「死生」が突き付ける深刻な問いは人間に、或る種の苦痛を与えます。宗教は、そうした苦痛からの救済装置として、これまで役割を果たしてきたと言えるかもしれません。

〔触れないのが最も無難で賢明？〕

このように、人間にとって重要なテーマであるだけに「死生」「宗教」ともに、教育の法制度的枠組みの中で言及されています。例えば、教育法の最上位にある教育基本法においては、「死生」「宗教」というテーマが公教育の中で配慮され、教えられることの必要性が謳われています。しかし、「死生」「宗教」という主題はともに、具体的な学校現場で「いつ？ 誰が？ どうやって？」扱っていくのかの記載は為されていません。

〔「いのちの教育が大切」という素朴理論〕

近年「少年犯罪」の発生件数は、ゆるやかに減少しています。これは、少子化に起因するところが大きいと思われる。他方で、14歳未満の触法少年も一定比率で存在することも確かであり、某かの事件が起こる度に、「いのちの教育が大切！」といった主張が繰り返されます。

しかし、子どもにおいて「生物学的な死の理解が不足していること」と「いのちの軽視」とを結びつけ、「死に関する知識・概念の発達促進のための教育が必要」と主張する流れは、素朴理論に基づくものに過ぎないのではないかと松田さんは指摘します。

実際、「死についての理解度」と「いのちに対する軽視的行為／認知」とを関連付けた実証研究はないそうです。また、就学以降の子どもは死の概念の三大要素（不動性・不可逆性・不可避性）を正確に獲得している、という研究報告もあります。むしろ「いのちをめぐる問題認知／行動」との関連性で言えば、「死の知識的理解」よりも、「死への感情的反応」「衝動性」「共感性」など、パーソナリティ的要素との繋がりが高いと言えそうです。

〔児童に対するデス・エデュケーションの現状〕

松田さんが紹介した全国規模の調査によると、義務教育課程校における「いのちの教育」の実施率は、ほぼ 100% に達します。このうち、年間を通した実施率は 3-4 割に下がるものの、それでもかなりの高率と解釈できるでしょう。というのも、学校現場でのカリキュラム運営上の制約（他にも教えるべきことが山積）、資源上の制約（誰が実施するのか、どのような教材を用いて実施するのが不明確）などから、現状では実施が滞ることに致し方ない部分があるからです。

むしろ、この調査結果から松田さんが危惧するのは、

- ・死生教育が健康教育の一部であることについての認識の低さ（忌まわしいものを遠ざける発想）
- ・死生教育を独立科目にすることに対する否定的意見
- ・死生教育は学校よりも家庭で実施すべきとい

う考え

・「いのちの教育」という名称に対する抵抗感・嫌悪感

などです。

〔幼児に対するデス・エデュケーションの意識〕

話題提供の中では、松田さんご自身が実施された「設置母体が宗教系でない保育園・幼稚園」への質問紙調査結果も紹介されました。こうした調査では、対象となる保育士・幼稚園教諭の中で、例えば「宗教性」という言葉の解釈に幅があるため、実施時点で調査者が居合わせ「半構造化面接」に近い形をとっていく必要性も同時に指摘されました。

調査結果では、自園の園児に対し「生」や「死」に関する教育活動に関し、9割以上が「必要」と答え、9割以上が「実施している」と答えていました。また、自らの教育活動について8割以上が「頻繁なほうだと思う」と答えていました。

他方で、「生」や「死」に関する教育活動の実施の多くは、「植物」を題材にしたケースが多くを占めています。また、多様な宗教的背景をもった園児の存在から、実施上「園児の宗教的属性についての配慮が必要だと思う」との回答は9割を超えていました。さらに「生」や「死」に関する教育活動を実施する上で「宗教的な行事や説明は有効だと思う」という回答は、5割に留まっています。

この調査から、松田さんは、教育／保育者の中に宗教に対する「接近」「回避」が混在する独特のパターンを見出しました。そして、こうした教育／保育者の宗教心理の整理をすることで、ひいては子ども的人格形成に繋げていく構想の一端を語っておられました。

〔死生学と心理学〕

松田さんのご研究の志向性は、ご自身の関心を「心理学」の手法や道具立てに照らして具体的な研究デザインに落とし込んで行く極めて心理学的なものだと感じました。その意味で、このご発表は、「死生学から(その外部にある)宗教心理学に期待すること、協働できること」ではなく、「死生学の内部での宗教心理学」の有り様を描くものであったと思います。

学問的な知の在り方として、しばしばスンマ Summa とシステム System が対置されます。スンマとは、例えば「神学大全」における「大全」に相当し、数多くの個別ケースへの対処を基礎として、それら全てを要約 summary・整理し順に並べてしまうものです。またシステムとは、自然科学に多く見られる「体系」であり、まずは、幾つかの法則または普遍命題を導出し、そこからの演繹として個別ケースを位置づけていくものです。

松田さんは、ご発表の冒頭、定義の紹介の場面で、死生学を「死」と「生」について体系的に考える学問「学問である以上体系的である必要がある」と語っておられました。他方で、非常に多彩な分野の学問が関わる死生学における「知」の在り方は、体系的であるべきなのか、という疑問は残ります。例えば、これまで宗教における「生」「死」に関わる仕方は「大全」的な部分が無かったか、と感じます。また、個々の人にとっての「死」がまさに「唯一無二の、この死」である以上、演繹的な体系化を拒む部分を含んでしまうのではないかと、とも思います。

いずれにせよ、死生学と心理学との関わりのためには、もう少し明瞭な全体の見取り図が必要であるように思いました。

4. 「学術コミュニケーション(出版)から宗教心理学に期待すること、協働できること」木村 健

ここまでの3人の話題提供者が、自ら研究・実践を営む身で発表されていたのに対し、最後、私(木村)の話題提供は、軸足を研究・実践の外に置く形で行わせていただきました。その意味では、シンポジウムの中では、随分と異質な内容となっていました。

どのような学問的な営みも、研究・実践コミュニティ内部でのコミュニケーションに基づいて進展していきます。そのコミュニケーションには、最新の知見の公表から後進の育成まで、実に多様な機能が含まれます。

他方、より深くテーマを追究する上で専門化・細分化が避けられない研究・実践の本質から、例えば、宗教心理学の1主題を扱う研究者・実践家が「国内でごく少数」しか存在しないといった

状態が生まれることも珍しくありません。今後、予想される少子化・人口減少社会の中で、研究者・実践家にとって不可欠な学術コミュニケーションの機能をいかに確保するかは、焦眉の課題と言えるでしょう。

同様の構図は、研究・実践に寄り添う学術専門書出版の世界にもあてはまります。恐らく、今後、大量生産・大量消費を前提にしない収益モデルの構築が望まれるのとともに、それでも少しでも読者を増やす工夫としての分野間の連携に期待する必要があるでしょう。さらには「連携に期待する」だけでなく「連携を促す」活動が必要なのかもかもしれません。

とりわけ、

- ・「宗教」は「心」を扱う上で避けて通れないテーマ
- ・「宗教」は人を「人」たらしめている本質（「人類種」を他の動物種から隔てるメルクマール）の一つ
- ・「宗教」は広く「心」を扱う諸学・諸実践にとって「興味深く」「重要な」テーマ

であることから、宗教心理学と関連領域との連携を見守っていきたくて、さらには学術コミュニケーションや出版活動における連携方策も模索していきたくて考えています。

タイムアップ

各話題提供者の発表は、制限時間 20 分間のところ、それぞれが 2 ～ 6 分ずつオーバーする形で進展してきてしまったがため、シンポジウムとしては 20 分間を予定にお願いしていた森岡さんの指定討論の時間が 10 分となってしまった上、全体ディスカッションの時間をとれない形態となってしまいました。

最後に、森岡さんがお話して下さった貴重なご指摘を振り返っておきます。

「指定討論」森岡正芳さん

冒頭、この研究発表会が「12 回」という年輪を重ねていることについて、森岡さんからは、「10 年以上の歴史をもつのは大変なことだ」とお褒めの言葉をいただきました。また、今回のシンポの

サブ・タイトルについては、「宗教心理学「に」できること」などではなく「宗教心理学「と」できること」にしてあることに対し、「なかなか良い」というコメントがありました。

森岡さんご自身が宗教学ご出身で、心理学へ手を広げて来られた経緯もあり、昨今、2 つの領域に社会の中で接点が出来てきている、というご指摘がありました。今般の日本心理学会は、会場である同じ同志社大学で日本宗教学会と一部スケジュールが重複する形で実施されました。課題が重なり合いつつある現状を鑑みた時、今回の同時開催は偶然ではない、とすら森岡さんは見ておられます。個々の現場での人々の理解はアンビバレントなものにならざるを得ないとはいえ「究極的なもの」への関心が高まりつつある、ということでしょうか。

昨今、宗教学／心理学はともに、実践を意識し始めたといえます。そうした中で、森岡さんは、話題提供者の研究・実践を当人のバイオグラフィとの関わりの中で見ておられたといえます。研究者の人生全体との関わり、その中で出会った問題意識や、体験の深まりの中で課題が定位されていく様に注目されていました。

さらに、シンポ前日には、学会企画として「学士課程における心理学教育の質保証に関する参照基準の役割：学術会議の参照基準検討部会報告公表を顧みて」が開催されていました。その中では「心理学とは何か」「心理学を学ぶことで何ができるようになるか、どのような力がつくのか」が問われていたといえます。森岡さんご自身、宗教学を学び始めた当初、親御さんから「宗教学を学ぶことに、どのような意味があるのか」と問いつめられたそうです。また心理学に移ってからは、親御さんの態度は好意的なものに豹変したとのことでした。宗教学と心理学には、どのような違いがあるのでしょうか。時代の変化を感じます。

森岡さんは、心理学の独自性として、「人」に対して相対的な眼差しを向けることができる点、さらには、自らの営みに対する批判的態度を保持できる点を挙げておられました。しかし、近年では欧米を中心に「脳神経科学と宗教」「進化論と宗教」といったテーマが盛んに取り上げられるよう

になっています。もはや、分野・領域の垣根が不要になってきていることも時代の大きな特徴なのかもしれない、といったご指摘もありました。

〔岡田さんの話題提供に対して〕

まずは、岡田さんが「何に惹かれて」この道を進んでおられるのかに、森岡さんは興味を持たれたそうです。岡田さんはスエーデンボルグにも言及されていましたが、森岡さんは、ヘレン・ケラーの著書『私の生きる世界』を読まれた際の驚きを語っていただきました。そこには、多くの感覚を奪われているだけに、触覚・体感によってのみ得られた深い質を伴った、「彼女の生きる世界」が見事に描かれることが述べられました。

岡田さんのおられるアルコール依存、医療観察病棟は「シビアな現場」ではあるのですが、そこに通底するものとして、自分で抑えられない「過剰性を持つ世界」を森岡さんは見ておられました。岡田さんは精神科医療の現場におられるので、内省をどのように育てるかといった実践的なことを考えておられるのですが、宗教学の立場からも AA のセルフケアグループの分析は進められてきました。また、ペイトソンの『自己のサイバネティクス』の観点からの AA の分析も有名であり、新たなテーマを発見できる可能性が示唆されました。

〔安藤さんの話題提供に対して〕

安藤さんが挙げた、極限的状况において死の線引きや判断の正当性に向き合わねばならない看護師さんの痛切な悲嘆については、森岡さんも身につまされる思いを語られました。ドナーのトータルな人生への視座という観点からは、「死」に接する者には意味の絶えざる再構成が必要なのであり、時間が必要となるのでしょう。

また、言説への批判的検証という営みは重要です。さらに従来、心理学は「臨床」実践と葛藤を起こしやすい歴史があります。森岡さんは自らのナラティブ・アプローチと併置しながら、安藤さんの取り組みに「臨床的科学」の可能性を見出しておられました。

〔松田さんの話題提供に対して〕

森岡さんは、松田さんが長年続けてこられた「人が「生」「死」に向き合っていくための取り組

み」に敬意を表しつつ、教育関連の法制度の公共的意味に触れ、疎いながらも「学校で教えている自分」について自嘲も交えて語り始められました。

教育の現場で、生死がタブーになる仕組みは確かにあるのですが、他方、究極的なことを扱う以上、人々の態度がアンビバレントになってしまうのも致し方ない面がある、といったご指摘がありました。

日常の中には「感謝」や「祈り」などが現存しています。これら、広義の「媒体」を通して死生観が育まれる側面があります。教育の現場としては、こうした媒体をどのように作っていくかが課題と言えるでしょうし、それには社会・文化的なものが大きく関わってくるのが、指摘されました。

〔木村の話題提供に対して〕

森岡さんには、「本が売れない」という「危機感」とともに、連携に対する「心踊る」部分を取り上げたことを、ピックアップしていただきました。

『聖書』の広範な普及に代表されるように、書籍と宗教との繋がり深さというご指摘には「なるほどな ... 」と感じ入りました。また、宗教には「古い物を残す」という姿勢があるのに対して、昨今の日本の心理学は新しいものばかりを求め、古い本が捨てられてしまう傾向があるといえます。「心理学の歴史性の無さ」というご指摘には、身震いするものがありました。

宗教と心理学の持つ潜在力に期待し、是非、協働していきたいという宣言とともに、森岡さんの指定討論が終わりました。

終わりに

以上で、発表報告を終わります。原稿執筆を引き受けておきながら、自身の力の不足を実感いたしました。取りまとめの不備を、どうぞご容赦ください。また、シンポ登壇を打診くださった松島さん、ご一緒させていただきました岡田さん・安藤さん・松田さん、そして、当日ご聴講くださったみなさんに感謝いたします。不遜ながら、シンポ当日は、とても楽しませていただきました。ありがとうございました。

日本心理学会第 78 回大会公募シンポジウム報告

宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連(2)

—宗教が精神的健康に与える影響はいかなるものか—

酒井克也(出雲大社和貴講社)

去る 2014 年 9 月 10 日(水)～ 12 日(金), 京都の同志社大学今出川キャンパスにて, 日本心理学会第 78 回大会が開催され, わが宗教心理学研究会は 9 月 11 日(木)の午後, 2012 年度より行ってきた科研費調査(基盤研究(B)課題番号 24330185)の成果報告の場として, 「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連(2)—宗教が精神的健康に与える影響はいかなるものか—」と題したシンポジウムを行いましたので, ここにご報告いたします。今回は, くしくも 9 月 12 日～ 14 日にかけ, 同じ会場にて日本宗教学会第 73 回学術大会が開催され, 数名のメンバーは「かけもち」という形になったとのこと。酷暑の中, 厳しくも充実した日々を送られたことと存じます。

さて, シンポジウムのほうは, 用意した資料が足りなくなるほどの盛況ぶりでした。年々, 宗教の心理学的研究という分野に注目が集まってきていることを実感いたします。冒頭, 松島公望事務局長(東京大学)より挨拶と趣旨説明がなされました。現代の日本において, 宗教が私たちのメンタリティにどのような影響を与えているのか, 特に精神的健康や苦難への対処などの場面においてその意義は何か, という問題について, マスメディアや人文学系の研究グループなどがこれまで様々な考察を行ってきましたが, 今回の科研費調査の結果は, そうしたものを実証的に裏付けるものであることを強調されました。調査に関わった身として, 3 年間にわたり集めた膨大なデータを, まさにそうした価値のあるものに分析, 解釈していくことの大事さを再確認した次第です。

1. 話題提供(質的研究班・非日常／有事におけるケース)

1-1. 『宗教における喪失の意味づけおよび精神的傾向との関連』浦田 悠(京都大学)

さて, トップバッターは浦田悠先生です。人は自らの喪失経験を, 宗教／スピリチュアリティとの関連においていかに意味づけをするのか, また, その様な意味生成が精神的健康をサポートしうるのか, ということに関する研究のレビューを通して, テロや自然災害などの場面での研究結果からその関連性の検討がなされました。

中では, 宮城県の神社での絵馬作成の試みや, がれきの中に意図的に置かれたと思われる本のタイトルなどから, 被災者の方々の内的な状況なども推察され, ひじょうに胸に響く発表でした。大規模災害などにおける喪失は多重的・複合的で, ひじょうに大きなものであることから, 宗教的な意味を生成する必要性が強いことが理解できました。同時に, 多くの研究において喪失や死別からの立ち直りと宗教性・スピリチュアリティの高さの間にポジティブな関連性が示唆されているものの, 研究デザインが完全でないものも多く(縦断研究がほとんどない, 回顧的研究の recall bias の問題, 女性が対象のものが多い, 因果モデル適用の疑問など), 一概に関連性を結論付けられない一面もあることが示されたことで, こうした研究の難しさも感じました。

レビューに関しては, 災害による喪失の研究論文が 2000 年以降, アメリカでのハリケーン・カトリナ(2005)や, 世界各地での地震の多発などを機に激増したこと, 質問紙を用いた量的手法が多いこと, 変数には, 宗教的信仰やスピリチュアリティの高さ, 宗教的コーピング, 災害への暴露, トラウマ, PTSD, 心理的苦痛, 抑うつ, 薬物利用, ソーシャルサポートなどが多いことなどが示されました。また, 今後の研究における課題として, 「宗教」と「スピリチュアリティ」の定義づけの問題が示されました。これらの語が示す範囲を, それぞれ広げるべきか狭めるべきか, 分けるべきか同一視するべきかなどは, 研究によってひじ

ようにバラツキがあるとのことで、我々の今後の課題の重要な点となることを実感しました。

最後に、今後の方向性の提案として、進化心理学や生理学、認知科学などと接続して行くことの重要性、「苦難のある所に神がある」という言葉の意味することの検討、仏教的無常観と精神的健康の関連性の検討などを挙げられ、有意義な内容盛りだくさんのうちに報告を終えられました。

1-2.『震災による喪失と宗教との関わり—法要に集う人々の語りからの羅生門的接近—』川島大輔(中京大学)

続いては、川島大輔先生より、神戸市長田区において、阪神淡路大震災以後現在まで続く「ろうそく法要」の調査報告がなされました。そこに集まる宗教者、復興支援団体のメンバー、ご遺族などへのインタビューを通して見えた、喪失と宗教の関連について「羅生門的」に迫っていただきました。「羅生門的」というアプローチはひじょうに興味深いものでした。これは、芥川龍之介の小説を原作として黒澤明監督が映画化した『羅生門』に表現されている、相違なる複数の視点や声を重ねることで、対象に多面的に迫ろうとする手法であるとのことです。

今回の調査において重要な点は、「ナラティブ」という観点であると述べられたときは、わが意を得たりとひざを打ちました。人の語る言葉は、常に多重的な意味を持っていて、単一、同一の意味としてとらえられないということ、置かれている立場や状況により、意味づけが異なること、その「ズレ」が新たなコミュニケーションを生み出すことなど、インタビュー時には必ず念頭に置くべきポイントがよく理解できました。

実際に協力いただいた5名の方々への半構造化インタビューをもとにしたフィールドノートには、ひじょうに生き活きとした、ある意味では生々しい語りで紹介され、臨場感や息づかいまで感じられる報告でした。記号化されたデータから得られる成果とはまた違う、まさに「質的」な成果というものを見せていただきました。それを読むことで、長年にわたる法要への参加を通して、それぞ

れの立場にある人たちがどのように出会い、関わり、つながって来たのかが実感できました。たとえば、夫婦の間にも法要との距離感に違いがあったり、亡くなった方々との関係性、法要そのものの意義などにも「ズレ」があることが歴然と理解できます。それを多層的に重ねることで、喪失を乗り越えてこられた姿が目に見え、法要という儀礼が、死者を、遺族を、街を、震災を忘れないための文化的装置として機能していることが理解できました。

こうしたデリケートな問題と接する調査には多くの難しさがありますが、実践するうえでの注意点として、「宗教儀礼⇒喪失後の適応」という単純な因果論では説明できない部分まで考慮すること、20年という長期間継続してきたという面と法要の位置づけが緩やかであるという両面を考慮すること、不在のもの(死者)や未在のもの(これからの時代を担う若い世代)への応答責任などに考慮することなどが挙げられました。また、今後の課題には、対象が、法要に関わっている人たちに焦点化しているので、不参加者の声も、もっと集めたいという点、回顧的な語りのため、実際のプロセスとは異なる部分があることへの配慮などが挙げられ、フィールドワークの有意義さとともに、困難さも痛感しました。

2. 話題提供(数量的研究班・日常／平時におけるケース)

『日本人における写経に関する実験的研究—宗教心理学における実験的研究の可能性—』中尾将大(大阪大谷大学)

最後に中尾将大先生より、数量的研究班からの発表がなされました。ここでは、2007年より仏教の行の一つとしての写経に注目し、研究を重ねてこられた中で提唱された理論や仮説を、実証的に裏付ける実験計画が提案されました。具体的には、写経の前後、あるいは写経中の脳波(前頭前野)や心拍数などの生理的反応を測定することによる、意識の集中状態やリラクゼーション効果などについての検討です。

写経という行が精神的健康に寄与することを実験により実証するためには、非常に複雑に絡

み合っている多くの要素(環境要因その他の知覚刺激など)を統制して、シンプルにとらえる必要があることがよく分かる説明でした。そうした配慮の上で、三項強化随伴性の理論をベースに写経行動をとらえた当初の試みは、とてもわかりやすいものでしたが、シンプルなゆえに不完全性が見えたとのことです。その後、写経行動の後にまた日常生活に戻り、また参加するという循環を考慮したモデルの構築(2012年、2014年)へとつながって行く過程からも、実験モデルの構築の妙味が味わえました。

最終的なモデルは、「写経行動を通じて生じる心理的変化のモデル」と題され、生活の場(日常的空間)と寺院(非日常的空間)とを行ったり来たり(循環)することで、徐々に両空間が近づき、重なりあい、最終的には(概念的に)一致するという流れが示されました。その効果を実証するために、訓練群(長年写経を続けているグループ)と統制群(初体験グループ)の比較、また訓練前後の比較などを想定しています。写経の前に脳波を測定することは想像できましたが、その際に「日ごろの悩み事、あるいは解決を望んでいる問題や心配事などを思い浮かべながら」計測するという発想が興味深いところです。

そもそもご自身が写経行動を実践するにいたった経緯(大きな喪失経験)がバックグラウンドにあり、体験を通して得た変化を分析することに端を発しているため、理論構築には矛盾がなくスムーズに感じました。ストレスの多い現代社会においては、非常に有益な示唆を含んでいることは明確です。実践段階になれば、予想外の困難も起こるでしょうけれど、一つひとつ丁寧に解決して進まれることを望んだ次第です。また、個人的には、神道にも「浄書」という、祝詞を書写する集まりがあるので、将来にはそれと比較しても面白いと感じました。

3. 指定討論(宗教者の立場から)

3-1. 神道の立場から 酒井克也(出雲大社和貴講社)

今回、不肖私こと酒井が、指定討論という重責を担うこととなりました。勝手のわからぬ初体験

ゆえ拙いものとなりましたが、要点を報告致します。

何より、「宗教とは、ナラティブである」と言っても過言ではないほど、宗教に求められる要素には、物語、語ること、～観(人生観、価値観、死生観など)が、どのように提供されているのかが重要だということを確認しました。人間は、(本当は無いかもしれないけれども)自らの体験や人生に意味や価値を求めます。喪失経験や災害による被害にも、意味や価値というナラティブがあれば救われることもありましようし、苦難を乗り越えられるかもしれません。

写経にしても、無心に書いている中で、さまざまなことを回想し、思いを巡らせる中で人生観や価値観が変換していくという効果、つまりナラティブ的な効果があるのではないだろうか思った次第です。

浅い理解しかできなかったのですが、松島先生よりフォローをいただき、「ナラティブという質的研究というイメージがあるが、そこに実証的なデータを盛り込んでいければ、まったく新しい観点から宗教を研究できる可能性がある」とまとめていただき、汗をぬぐいました。ここに感謝申し上げます。

3-2. 仏教の立場から 平子泰弘(曹洞宗総合研究センター)

締めには、平子先生がビシッとまとめてくださいました。

まず、浦田先生の発表に関しては、「宗教とスピリチュアリティを分けて考えるべきか否か」という点に言及されました。ターミナルケアの研究に関わっていらっしゃるお立場から、宗教的なケアとスピリチュアリティのケアというものは一線を画しており、両者はハッキリと区別すべきだという考え(東北大学の谷山先生)は、納得がいくとされました。そこを明確にすることで、無用なトラブルも避けられるという効果も期待できるようです。えてして混在しがちなこの部分をどう扱うかは、今後我々にとっても大事な点であると確認できました。

次に、これは全体にわたっての課題でもありま

すが、宗教的实践を続ける人がどのタイミングで救いや安らぎを実感するのかということも、大事な問題だとされました。さきの震災から3年半が経ちましたが、宗教的な支援も少なくなっていると聞きます。そういう時期だからこそ私たちにできることがあるのではないかというお話は、目からうろこが落ちる思いでした。人によっては、10年後、20年後にようやく安堵することもあるという事実を、忘れないよう覚悟をしました。同時に、自分では「立ち直っている」という自覚が持ちにくいのが人間であるというご指摘にも、納得です。支援する側とされる側とでは、視野もナラティブも別世界なのだと確認致しました。

ろうそく法要も、写経も、宗教的实践という意味では「行」ととらえますが、曹洞宗では坐禅があります。その際には「何も考えない」ことが求められます。無心になって、あれこれと考えることを一度リセットする行です。その中で色々なことに気づかされていくという要素を考えると、中尾先生の言う「悩みなどの解決を思い浮かべて」というのは検討の余地がありそうだとされました。

4. フロアとの討論

4-1.フロアとの討論①

中尾先生に、書き写すものが仏教の經典である、すなわち宗教性を帯びた文献である(宗教色の無い文章や、ランダムで無意味な文字列ではない)ということの意味や影響についての考えを伺いたいとご質問がありました。そもそも、書いている人はその意味を考え続けているのかなどについても併せてご質問。それに対して中尾先生は、ほとんどの人は、「写経中に何を考えていますか?」という質問に「何も考えていない」と回答しているので、その意味では無心になって書いていると考えられることを説明されました。漢字の經典ではなく、ひらがなで「なむあみだぶつ」と描き続けるかたもあり、数種類の經典についても、その内容を理解して書いているかという、それはわからないので、実際にランダムで無意味な文字列や幾何学模様などを書かせる群なども作り、実証していきたいと返答されました。

4-2.フロアとの討論②

お父上が曹洞宗の人で、今年の9月から福井のお寺で修行をしていらっしやるとのこと。以前見たテレビで、般若心経は、意味を考えなくなるまで書き続けることが大事だと解説されていて、本日の話と通じるものを感じたとされました。父上も、坐禅において同じことをおっしゃっていたそうです。そこで、私(酒井)が述べた祝詞を浄書する場合に、意味を考えて書くのかどうか、ご質問をいただきました。私からは「神道の浄書においては、ほとんどの人が意味を考えて書いていると思う」と返答しました。と同時に思い出したことで、神道では滝に打たれたり山を歩いたり、冬の海に浸かったりする行を大事にしている、その際には何も考えない(考えられない)状況に身を置くことになるので、その意味では、「宗教は、ナラティブと身体性である」ということが言えるとお答えしました。

4-3.フロアとの討論③

自分は「部外者」であるとおっしゃりながらも、日吉神社の宮司様のお話、葬式仏教と神仏分離令の関係などさまざまな具体例を挙げて、貴重なご指摘をいただきました。

今回私たちが定義している「宗教」が、一般日本人の理解する宗教なのであれば、神道にせよ仏教にせよ、これまでに政治的な規制を受け、歴史の紆余曲折があつて今の姿になっているという前提を踏まえなければ、そこから効果だけを抜き出して語っても日本人としてピンとこないのではないかとされました。日本人が納得できる歴史的・政治的成り行きまで取り入れてこのプロジェクトを進めることで、よりわかりやすい、有益な成果が得られる可能性をいただきました。

それに応えて松島先生からは、以前、国学院大学の井上順孝先生よりご指摘を受けたことを思い出したことを話されました。それはまさに、心理学は「今」をやりたいがるので、歴史的な背景を踏まえてこそ、そこから学べるものがあるという事実を忘れるなどということでした。我々には、まだまだその部分の裏付けが足りないこと、「信仰・信心」ではない部分から学びとる姿勢を忘れては

ならないことなどを再確認して、盛況のうちに閉幕となりました。時間ぎりぎりいっぱいまで熱い論議を展開できた、非常に内容の濃い、充実したシンポジウムだったと回想しております。

余談ですが、その夜に開いた懇親会へのお誘いを閉幕時にしたところ、数名のご参加の方が

あり、その席でもまたまた議論は白熱。これからの研究姿勢や方向性、方法論などに花が咲いたことも、あわせてご報告いたします。冗長な分となつてしまいましたこと、お詫び申し上げます。有難うございました。

日本心理学会第 78 回大会公募シンポジウム「宗教心理学的研究の展開(12)－宗教心理学とできること－」に参加して

岡田正彦(栃木県立岡本台病院 精神保健福祉士兼認定カウンセラー)

1. はじめに

平成 26 年 9 月 11 日(木) 9:20 より、同志社大学 RY402 号室におきまして、日本心理学会第 78 回大会公募公開シンポジウム「宗教心理学的研究の展開(12)－宗教心理学とできること－」が開催され、報告者も話題提供者の一人として参加させていただきました。

企画代表者の松島公望先生(東京大学)司会の下、安藤泰至先生(鳥取大学)、松田茶茶先生(関西保育福祉専門学校)、木村健先生(ratik)、そして報告者の 4 名がそれぞれの専門分野(領域)から話題提供させていただき、森岡正芳先生(神戸大学)より指定討論をいただきました。

つまらない映画等を観賞しているととても長く感じる 2 時間ですが、今回のシンポジウムは、本当に「あっ」という間の 2 時間で、参加された先生方も、「もっと時間が欲しい」「もっとこの場を共有したい」と感じたのではなかったでしょうか。報告者もその一人でした。

当日は、アルコール専門医療・医療観察法指定医療機関における「臨床」というごく限られた狭い領域から、「生命倫理」、「死生学」、そして「学術コミュニケーション」といった幅広い専門分野(領域)まで、宗教心理学「と」できることを模索した、非常に価値ある創造的な 2 時間だったと思っております。

以下、紙幅の許す範囲内で、日本心理学会第 78 回大会公募公開シンポジウム「宗教心理学的

研究の展開(12)－宗教心理学とできること－」に参加しての感想を徒然なるままに記させていただければ幸いに存じます。

2. 報告者の立場性

報告者は、かつて日本心理学会第 71 回大会のワークショップ「宗教心理学的研究の展開(5)」にも話題提供者の一人として参加させていただき、その時も、「宗教心理学専攻者の臨床実践の一例」というタイトルの下、今回同様自らの臨床経験を報告させていただきました。しかし、この時の報告者の立場は、最初に学んだ社会福祉学から宗教学的宗教心理学へ転向し、その転向した領域(即ち宗教学的宗教心理学の視点)からその当時の臨床経験があるといったスタンスで、主にアルコール臨床について話題提供させていただきました。

しかし、この度、松島先生から標記のテーマをいただき、自らの臨床経験を振り返る良い機会を与えていただきまして、上述の第 71 回大会のスタンスとは異なるオルタナティブなストーリーを報告者自身気づくことができましたので、感想と併せて、以下、それについても記させていただければ幸いに存じます。

当日の報告者の発表は、セルフヘルプグループで当事者の方が(例えば AA でアルコール依存症者御本人が)自らの体験を赤裸々に語るように、報告者も自らの体験を中心に、テーマと重ね合わせながら報告させていただきました。

いただいたテーマは、「精神保健福祉の臨床現

場で宗教心理学とできること」でした。

そもそも報告者が、最初に社会福祉を専攻しようと思った切っ掛けについてですが、それは誰もが御存知の三重苦の聖女ヘレン・ケラーと彼女の生涯に献身的に関わったサリバんに共感し、報告者自身も(その可否は別に)障がい者の方々にとってサリバンのような存在になりたいと思ったことに端を発しております。しかし、学部時代、ヘレンが40代に記したその著書『私の宗教』に目を通したとき、勿論、サリバンやジョン・ヒッツを最も大切な恩人の一人としながらも、その中でヘレンの賞賛を浴びていたのはスウェーデンボルグに他ならなかったのです。

報告者は、ヘレンをして「私の闇を光に変えた信仰は、私が今まで気づいているよりもっと、スウェーデンボルグに負うところが多いのではないか」と感謝しつつ思うのである」と語らせたスウェーデンボルグの世界観に興味・関心を抱き、その後宗教学へ足を踏み入れていくことになっていったのです。

報告者は、社会福祉を学んでいる時からそうだったのですが、宗教学へ転向してからも、アプローチの方法は、心理学的手法と相性が良く、宗教学研究室におきましても、宗教心理学に関心の比重をおきまして、「スウェーデンボルグの世界観」への宗教心理学的(含超心理学的)アプローチを試みておりました。

上述の過程の中で、精神科領域と非常に密接な領域に足を踏み入れ(故小野泰博副指導教官の多大な影響もございまして)、社会福祉を専攻していた時には夢にも思っておりませんでした精神科病院を臨床現場として選択していくことになっていったのです。

この過程は、日本心理学会第71回大会のワークショップ「宗教心理学的研究の展開(5)」の中では、自ら「転向」という形で捉えておきまして、「転向」先の宗教心理学を基礎として臨床を展開していると思込んでいたのですが、松島先生から、今回「精神保健福祉の臨床現場で宗教心理学とできること」と称するテーマをいただいた時に、学部時代に専攻した社会福祉学(ヘレン・ケラーとサリバン研究)は宗教心理学(スウェーデ

ンボルグの世界観の研究)に通じており、相互に補完し合いながら「連携」・「協働」という形で、現在の臨床現場があると実感することができるに至ったのです。

誤解を恐れずに記しますと、「社会福祉」学と「宗教」学は、そのアプローチの方法が類似しておりまして(「ゲリラ」的でもありまして)、対象とする現象は異なるのですが、歴史学や社会学、心理学等々、既存の(正規の?)学問からアプローチし、その対象(例えば「社会福祉とは何か」、「宗教とは何か」)を明確にしていこうという試みには、報告者自身親和性を持っておりまして、既述致しました通り、特にそのアプローチでは心理学との相性が良く、心理学的に「社会福祉」や「宗教」をみつめていくことを実践して参りました。

3. 宗教心理学「と」できること

報告者が実践してきました臨床は、一番長い領域が、アルコール専門医療でした。今年で、23年目になります。簡単にその業務内容を記させていただきますと、外来患者様が来院した際のインテーク面接(受理面接)にはじまりまして、外来・入院患者様並びにその御家族の心理的・社会的・経済的問題に関する相談援助、アルコール症リハビリテーションプログラム(ARP)に基づくグループワーク、家族相談、アルコール家族プログラムのファシリテーター等々、アルコール関連問題に悩む御本人並びに御家族のためであれば、あらゆる支援を展開しております。

上述のなかでも、特に力を注いでおりますのが、セルフヘルプグループとのコラボレーションです。

御周知の通り、1935年に米国オハイオ州アクロン市におきまして、ビル(株のプロローカー)とボブ(外科医師)が出会い、彼らによってAA(Alcoholics Anonymous)が創設されるまで、世界のアルコール依存症にかかわる医療は、誤解と偏見に満ちた暗黒時代の真っ只中だったのです。そのため、AAの創設は、アルコール依存症にかかわる医師をはじめとした多職種に、アルコール依存症からの回復の希望という一筋の光をもたらしたのです。

AAでは、回復のためのガイドラインとして「12のステップ」が、また組織を持たない共同体として、グループを健全に維持していくためのガイドラインとして「12の伝統」が備わっておりまして、これらがアルコール専門医療のみならず、宗教心理学的にもとても興味深いテキストになっているのです。勿論、AAは宗教ではありません。しかし、前史は、ブックマンにより提唱されましたオックスフォードグループ運動にまで遡ることができますし、また、上述致しました「12のステップ」と「12の伝統」には、「自分を越えた大きな力」(ステップ2)、「自分なりに理解した神」(ステップ3)等といった宗教性を帯びた文言が登場し、AAのバイブルとも言うべき『アルコホーリクス・アノニマス—無名のアルコホーリクたち—』の中には、無神論者や不可知論者の章もわざわざ設けられているのです。また、AAメンバーは「霊的な成長を求めている」ことから、やはり宗教心理学的な関心は強まっていくのです。

次に、上述したアルコール臨床に加えて、最近(平成17年度より)、「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律」(以下「医療観察法」と略記)に基づく対象者の支援にも関わらせていただく機会が増えて参りました。

不幸にして、精神障害が起因となり、心神喪失或いは心神耗弱により、重大な他害行為(殺人、傷害、放火、強盗、強姦、強制わいせつ)を行ってしまった者の「病状の改善」、「再犯の防止」、そして「社会復帰の促進」を目的(「医療観察法」第1条)に、医師、看護師、作業療法士、臨床心理士等の多職種の方々とチームを組んで支援を展開しております。

現在、報告者は、主に指定通院の対象者を中心に支援させていただいておりますが、平成25年6月に、報告者の所属する臨床現場にも、指定入院医療機関としての新病棟がオープン致しましたので、今後、入院処遇の対象者の方々への支援も増えていくことと思われれます。その中で、重要な位置を占めるプログラムが「内省」ではないかと、個人的には思っております。

そして、上述致しました、二つの臨床経験にお

いて共通する重要な視点が、ソーシャル・インクルージョンだと個人的には理解しております。

即ち、非常に誤解や偏見が多く伴っていると思われる、アルコール依存症や医療観察法対象者も、一定の入院期間を経た後には、退院して地域に居住するわけですので、その際に、誰も排除しない地域社会が用意されていなければ、臨床現場で実践されたプログラムの有効性が低下してしまうのです。ソーシャル・インクルージョンの実践的展開が、今後の大きな課題と個人的には思っております。

以上、紙幅の都合もございまして、簡単に、「アルコール臨床」と「医療観察制度における臨床」、そして両者の共通基盤としての「ソーシャル・インクルージョン」の3点について触れさせていただきましたが、上述の臨床経験に基づきまして、宗教心理学「と」できることについて、精神保健福祉の臨床現場から提案させていただきますと、以下の3点が挙げられます。

- ①アルコール依存症からの回復とスピリチュアリティ(AAでいうところの「ハイヤーパワー」を信じる能力)との相関性の探究
- ②医療観察法の対象者の内省の在り方の探求
- ③ソーシャル・インクルージョン推進へのコラボレーション

4. おわりに

指定討論の際に、森岡先生も仰っていたのですが、報告者自身も、「と」がとても良かったと思っております。

宗教心理学「が」できることであると、報告者自身、大上段に構えてしまい、自由な発想ができなかったと思っております。

しかし、「が」ではなく、「と」でしたので、非常にナチュラルで、宗教心理学が連結ピンの役割を果たしてくれまして、報告者の臨床に主導権を与えて下さり、既述させていただきましたとおり、セルフヘルプグループで体験発表をするが如く、臨床経験を自由に語らせていただいた後、宗教心理学「と」何ができるのかを考えさせていただいたので、滑らかな発想でシンポジストの役割を果たさせていただくことができました。

既述させていただきましたとおり、松島先生に、今回このようなテーマを与えていただき、自らの臨床を振り返る切っ掛けをつくっていただいたことは、報告者の立場性に新たな気づきを与えて

いただいたと同時に、臨床経験の整理・中間サマリーにも繋がり、新たな課題も認識することができまして、とても有意義な時間を費やすことができました。有り難うございました。感謝です。

戻ってきたつもりが、共にいた！ —日本心理学会シンポジウムに参加して—

安藤泰至(鳥取大学医学部)

このニューズレターに書かせていただくのはこれが二回目になります。最初はいつか調べてみたところ、10年前の第2号(2004年9月、「宗教心理を研究するということ」)でした。南山大の西脇さんを中心とした宗教心理学の科研に加わらせていただいたのがその翌年、思えばそれから約10年、自分としては宗教心理学から遠のいている(逃避している?)気でいました。医学部に勤めているということもあって、研究の重心がもっぱら生命倫理や死生学の方に置かれるようになっていったということが大きいのですが、宗教心理学に関連して次に何をやるか、という課題が自分のなかでうまく見つけれなかったということもあったように思います。したがって今回、松島さんに日本心理学会シンポジウムへの登壇を打診されたときには、ずっと宗教心理学から遠ざかっている自分にいったい何ができるのだろうかと躊躇する部分があったものの、「そろそろ宗教心理学に戻って来いよ」という天の声かもしれないと思う部分もあり、確たる見通しもなく引き受けてしまったというのが正直なところです。

学生時代から知っており、一緒に読書会などをしていた先輩の森岡さんがコメンテータを引き受けてくださったのはとても心強かったのですが、その森岡さんもコメントでおっしゃっていたように、「生命倫理」という現在の研究の主軸からめて私の任をなんとか果たすことができたのは、「宗教心理学『が』できること」でも「宗教心理学『に』できること」でもなく、「宗教心理学『と』できること」という斬新なテーマ設定のおかげだと思います。

振り返ってみれば、私が宗教学の研究を志したのは、そして宗教哲学と宗教心理学が交わるような領域で細々と研究を続けてきたのは、宗教というものを、教義や観念を軸にとらえるのではなく、運動や組織を軸にとらえるのでもなく、現代において(必ずしも「宗教」という形式をとらなくても)人間の生と死の具体的経験のなかに息づいているような広い意味での「宗教性」や「宗教心」を軸にとらえてみたいと考えたからでした。こういった「宗教」へのアプローチは、「越境するスピリチュアリティ」(『宗教研究』349号、2006年)をはじめとする私のスピリチュアリティ論につながっていくと同時に、単なる「手続き」論を超えて、私たちの生と死の具体的な現実のなかで発せられる「いのちの痛み」に基づいた「いのちへの問い」を問い続ける生命倫理をいかに構築していくか、という現在の私の中心的な仕事につながっていったように思います(この間の私の研究の総括的概観としては、「いのちへの問いと生命倫理—宗教にとって生命倫理とは何か?—」(『宗教哲学研究』第31号、2014年)をお読みいただければ有難いです)。

シンポジウムのなかで、主として脳死臓器移植問題についてお話したように、先端医療や生命操作技術に対する宗教的な立場からの批判論のほとんどは、こうした新しい医療技術が私たちの生と死の経験をどのように変えつつあるのか、そこで私たちにどのような具体的な苦悩や葛藤を強いるのか、ということについてのきちんとした認識を欠いた形で語られてきました。『宗教と現代がわかる本 2013』(平凡社)所収の拙論「宗教

的「いのち」言説の陥穽—いのちを蹂躪する社会のなかで—」でも書いたのですが、そうした認識不足による観念的な批判のために、生命操作技術を批判する宗教的言説がかえって現代社会におけるいのちの分断や管理、蹂躪に手を貸してしまうという事態が引き起こされています。シンポジウムの中で、臓器ドナー遺族のグリーンワークやグリーンケアをめぐる言説についてお話したように、心理学的な言説もまた(ほとんど無自覚的に)そうした生命操作の片棒をかついでしまう危険性があります。

今回、日本心理学会という、私はたぶん生涯に一度も来ないであろうと思っていた学会で「生

命倫理」をめぐる一見場違いな話をさせていただいたことをきっかけに、これまでの私の研究の道筋について改めて自覚できたとともに、他のシンポジストをはじめそこに集まってくくださった方々に「話を通じた」という感覚を強くもったことで、「宗教心理学から離れていた(そして戻ってきた)」と思っていたのは実は私の勘違いであったこと、私は宗教心理学「と」、そして宗教心理学を研究している人たち「と」、ずっと「共にいた」のだ、ということを確認させていただくことができました。企画を立てられた松島さんはじめ、他のシンポジスト、コメンテータの方々に深く感謝する次第です。

研究会企画シンポジウム(第12回研究発表会)参加からの収穫

松田茶茶

今年の研究発表会には「宗教心理学とできること」との副題が付いており、これまでとはずいぶん趣向の異なるシンポテーマであったため、話題提供の内容を決めるにあたり少々迷いました。これまでは宗教心理学に内包される、あるいは宗教心理学と関連する諸領域の中から特定のテーマを取り上げ、「宗教心理学に何ができるか」という視点で議論材料を準備することが専らであったように思いますが、今回は「宗教心理学と'ともに'できること」という視点をとらねばならず、これは非常に難しく感じました。「ともに」が意味するのは協働であり、互いに独立した異なる見地をとる二者以上が対等な立場で共通の目標の下に学術活動をおこなう、ということを経験として発表内容を構成することに苦心したわけです。なぜなら、私に与えられた題材は「死生学から宗教心理学に期待すること、協働できること」というものでしたが、それまで私は「死生学の一部が宗教心理学に内包される」という構図でこの二者の関係性を捉えていたためです。さらに、そもそも死生学はその学際性の高さゆえ、研究対象も方法論も一義的に定義づけることが困難であるため、「死生学」を代表して何かを論じることは無理であろうと

感じました。そこで、発表時点で私が従事していた保育者養成活動の中で死生学教育に関して思うことや考えること、調査したことを思いつくままにだらだらと書き述べ、その中から宗教心理学的に捉えることが望ましい事象を、発表を聞いて下さる方々がそれぞれに抽出して下さることを期待する、という他力本願な態度で話題を用意することにしました。

全くまとまりのない発表となってしまいました。が、「教育法」の中でも「教育理想論」の中でも謳われている「死生観」の育成に関して、公の教育理念で死生観教育が謳われる理由、実際に多くの現場の保育者が死生観教育を大切なことだと考えていること、しかし実際にはなかなか手がつけられていないこととその理由、また、死生観の育成に関連する実践がおこなわれている場合であっても活動プログラムに論拠がないこと、そういった問題を処理していく上で宗教心理学における研究知見が重要な手がかりとなる可能性を述べるのができたため、私が自分に課したミッションはクリアできた、と思うことにしています。

シンポ当日は、鳥取大学の安藤先生からも死生学のお立場からの話題提供がありました。が、

同じ死生学ではありながらも、"生命倫理"という全くフィールドも方法論も次元をも異にする領域からの重大な問題提起を拝聴することとなりました。私が保育者養成活動の中で感じた問題や、その問題に基づいておこなった調査研究は対症的な問題処理努力であるのに対し、生命倫理に関する思考はより根源的な問題であると思います。これまで私は死生学教育に寄与するための基礎研究の意義・目的を述べる際、自他への共感性を中心とする人格発達の観点から説明をおこなうことが習慣化していたのですが、私が今後の時間をかけておこなおうとしている研究の根底的な意義の一部は生命倫理の中に求められなければならないのかもしれない、と認識を新たかにしました。

また栃木県立岡本台病院の岡田先生のご発

表からは対宗教性興味、学術的視座、臨床・実践の3つの同時成立のためのバランスを、ratikの木村先生のご発表からは"成果発表の市場の認識"や"発信法"という、これまで微塵も考えたことのなかった分野への意識を刺激させられました。

シンポテーマがいつもとはガラリと変わっていただけあり、発表当事者として意識したことも学んだことも、いつもとは全く違いました。これはつまり、宗教心理学研究会が違うステップ/ステージに移っていったことの表れではないかと感じます。私はこのダイナミクスの変化についていけるのかどうか。なかなか追いつくことは難しいかもしれませんが、後追いの努力だけは怠けないようにしたいものです。

科研費企画シンポジウムをめぐる雑感

浦田 悠(大阪大学)

今回、私は「宗教と災害による喪失および精神的健康との関連」というテーマで発表させていただきました。本発表では、喪失と宗教に関する知見のうち、とりわけ災害(人災、自然災害)の前後における宗教の役割についての現段階でのレビューを報告しました。今回、その概要については酒井先生によるシンポジウムの報告に譲ることとし、そこから少し外れて、当日のセッションで出てきたいくつかのキーワードを元に2, 3の雑感を述べさせていただきます。

宗教とナラティブについて

指定討論者の酒井先生からは、話題提供全体へのコメントとして、ナラティブとしての宗教の側面についての指摘がありました。御霊をどう鎮めるのかに対する具体的な方法や、死後には神様となって生きている人を導くという物語を提供することによって、納得のいく人生観や死生観をもたらすのが宗教の役割であるという酒井先生のご見解は、まさにナラティブ・アプローチの視点と重なるものだと思います。

「なぜ私が?」「なぜあの人?」という問いに対して、「頭部外傷により……」「ストレスによる気分障害の悪化により……」というような自然主義的な因果論的説明で納得できない喪失を体験した時に、超越的な視点からのナラティブを提供し、確かな意味を保証するというのが宗教的ケアの特徴なのだと思います。すなわち、「不条理で無意味に見えるこの世界に、実は見えない秩序や深淵な意味が含まれているのだ」という世界観をもたらすのが宗教の大きな役割と言えるでしょう。ただ、(他所でも指摘したことがあるのですが)一方で、宗教をナラティブと見なすことによって生じる難しさもあるように思います。人が宗教的な救済を実感するとき、その人にとっては、「主観的・相対的な意味づけができた」「経験が組織化できた」という納得よりも、「超越的なリアリティに触れた」「無条件に絶対的に支えられている」というような確信が核にあるのではないのでしょうか。とすれば、それは通常のナラティブよりも切迫した、そして根拠がないことこそがむしろ根拠となる

ような信念に基づくものであり、かつそこには宗教者の何らかの介在が必要となるのかもしれませんが。私自身も宗教と喪失に関する質的研究に携わっていますが、喪失の語りと宗教性／スピリチュアリティの関わりを考える際には、その点を捨象した研究にならないように留意したいと思っていますところでは。

最近の心理学や脳科学との接点

発表では十分に取り上げることができなかったところですが、最近では、進化心理学や神経科学等の視点からも、宗教性／スピリチュアリティが取り上げられることがかなり増えているように思います。それらの研究では、なぜ人が宗教を求めるのか、ということに関して、これまでの宗教心理学の視点とは異なる様々な見解が見られます。

たとえば、発表でも少し紹介した Gray & Wegner (2010) の研究では、苦難への対処が必要な状況において、必ずと言って良いほど宗教が出てくる理由として、神は苦難の原因でもあり救済者でもあるからだ指摘しています。すなわち、社会的な動物として進化した認知システムは、理不尽な試練に対して何らかの意味づけができなければ満足できないため、罰する相手がない場合には、罰と救済の行為者となる神を置くというわけです。

そして、Bering (2011 鈴木訳 2012) は、そのような心理を支えているのは、私達の脳に特殊化された認知的ソフトウェア、すなわち心の理論であると主張しています。この主張からすれば、理不尽な出来事についての「なぜ」という問いが生じた時に、ヒトは言わば心の理論のスイッチを切ることができず、ランダムな出来事に隠された意図を過剰に考えてしまうため、そこで神やスピリチュアルな超自然的存在が持ち出されるということになります。

このような見方は、ある意味では進化心理学が台頭する以前からの無神論的な立場における常道的な捉え方かもしれませんが、その見方に一定の実証的裏付けが蓄積されつつあるということは、ここ十数年の新たな動きと見ることもできます。

これらの知見や研究の根本的な視点は、場合

によっては従来の宗教心理学と拮抗するものを多く含んでいるかもしれませんが、心理学的に捉えた現象の説明としてはたしかに一定の説得力を持っていると思います。これだけの知見がすでに蓄積されてきている現状において、科学としての宗教心理学を標榜するためには、簡単にそれらと融和すべきものでも、また無視すべきものでもないのかもしれませんが、もちろん、すでに神学的な立場と神経科学的な立場の議論も進んでいますし (e.g., Hick, 2010), 宗教心理学研究会のメンバーが中心となって進めてきた科研費研究プロジェクトでは、いわゆる生物・心理・社会の諸側面にアプローチする研究をしてくれています。今後、成熟した(すなわち多様な)視点を含みつつ超えるような宗教心理学を日本でも発展させていくことを一宗教心理学ファンとして切に願っています。

おわりに

曹洞宗の僧侶である平子先生からは、全体へのコメントとして、宗教離れや葬儀不要論の中で、宗教者がその傾向になかなか反論できないという指摘がありました。それは、宗教が心理的健康にポジティブな影響をもたらすことが実証されれば、現代における宗教の存在意義が示されるという願いに基づいたご見解かと思います。今回の発表でも紹介いたしました、喪失の現場においても、ポジティブな宗教コーピングは心理的健康に概ね良い影響を及ぼしていることが示されています。一方でカルマなどの見方は心理的苦痛を増幅される可能性も指摘されています。今後、このような宗教と心理的健康の複雑な関係についてのより深い検討がなされる中で、宗教的ケア、スピリチュアルケアのあり方がより洗練されたものになることを私も願いつつ、今後も研究を進めていきたいと思っています。

引用文献

Bering, J. (2011). *The belief instinct: The psychology of souls, destiny, and the meaning of life*. New York: W. W. Norton & Company.

(ベリング, J. 鈴木光太郎(訳) (2012)). ヒトはなぜ神を信じるのか-信仰する本能- 化学同

人)
 Gray, K., & Wegner, D. M. (2010). Blaming god for our pain: human suffering and the divine mind. *Personality and Social Psychology Review*, 14(1), 7-16.

Hick, J. (2010). *The new frontier of religion and science: Religious experience, neuroscience and the transcendent*. London: Palgrave Macmillan.

質的研究班の研究背景とその概要 —多様な意味づけに迫るために—

川島大輔(中京大学)

日本心理学会シンポジウムにおいて、震災による喪失と宗教の役割に関する話題提供をさせていただいた。発表内容は、科研費プロジェクト「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連」における質的研究班の研究として実施されたものである。阪神淡路大震災後、現在まで続く法要に着目し、宗教者、復興支援の民間団体、そして震災で家族を失ったご遺族の参加者へのインタビューを通じて得られた語りから、震災による喪失と宗教との関わりについて羅生門的に迫った。発表内容の詳細についてはシンポジウム報告に譲るとして、ここでは発表の背景について述べさせていただきたい。

近年、喪失経験後の適応をめぐる、トラウマ後の成長 (PTG: Post Traumatic Growth) やストレス関連成長 (SRG: Stress Related Growth) といった概念が注目されている。確かにこうした側面、すなわち喪失後にも何らかの学びや成長があることを指摘することが重要ではあるが、他方で、こうした概念のみが一人歩きすることも危惧される。それは、本人の能動的関与を度外視した「成長」の強調や強要につながるという危険性である。実際、喪失経験は、個々人によって実に多様であり、成長という言葉によってのみ言表されるものではない。それは後悔や自責の念、怒りといった側面と同時に、ある種の解放感や肯定的な側面の発見が複雑に絡み合った形で、また個人の主体的な意味再構成の活動の結果として、多声的に表現されるものであろう。こうした複雑かつ多様な意味再構成のありようは、

丁寧な聞き取りやフィールドワークによって掘り取ることが可能になると考えられる。ここから、質的研究班においては、おもにフィールドワークとインタビュー調査を通じて、喪失後の多様な意味再構成のありようと宗教性／スピリチュアリティの連関を検討することとした。

ところで先の大震災以降、新聞記事や報道等において宗教の意義が指摘されたように、喪失後のケアあるいは意味の再構成における宗教／スピリチュアリティの重要性が、広く日本社会において再認識されてきているように思われる。そして宗教者による対話 (語り、儀礼・儀式) は、遺されたものの精神的健康に少なからず影響していると考えられる。しかし宗教 (者) によるケアが、喪失を経験した当事者にとってどのように意味づけられるのかについては、不明瞭な部分も多い。実際には宗教的な関わりが肯定的に働く場合もあれば、否定的に働く場合もあるだろう。さらに言えば、物語の受け取り手として定位される門信徒や一般信者、ひいては一般市民も、宗教を意味づける際、その主体的判断によって聖なる物語を取捨選択し、自分なりの物語に再構築している。加えて、実際の対話の中では「宗教者＝物語の送り手、門信徒等＝物語の受け手」という構造が常に不安定なものとなるため、両者の相互行為に着目する必要があるだろう。そこで質的研究班では、両者の意味づけのあいだ、とくに認識の「ずれ」に着目することとした。なおここでは、「ずれ」をただちに解消すべきものとしては位置づけていない。それというの「ずれ」はどのようなコミ

コミュニケーションにおいても常に存在するものだからである。もっと言えば、一個人の語り内部においても、一つの声(意味づけ)だけが存在するわけではなく、つねに複数の声が存在している。このため、震災による喪失と宗教との多様な意味づけを、とくにその「ずれ」と「重なり」に着目して描出することで、宗教者と門信徒等、また当事者間の新たなコミュニケーションを促すことができると考えた。

以上が質的研究班の研究背景である。質的研究班では、具体的に、1)東北および関西におけるフィールドワーク、2)災害による喪失と宗教、精神的健康に関する文献レビュー、そして今回発表させていただいた3)慰霊法要に集う人々へのインタビュー調査、を実施した。発表内容にあったように調査の結果、震災による喪失を経験

した人々に対して、ろうそく法要という宗教儀礼は、「(死者を、遺族を、街を、震災を)忘れない」ための文化的装置として機能していることが明らかとなった。その一方で、語り手によってその意味づけが異なること、また法要以外の様々な(宗教的・非宗教的)関わりの中の「一つの」儀礼であることも同時に浮き彫りとなった。ここから宗教の関わりが喪失後の適応を促すという単純な因果論で説明することが困難であることが示された。さらに「成長」メタファーに限定されない、宗教と喪失後の意味再構成との多様なむすびつきを明示することができたといえる。今後、研究結果をまとめて発信していく予定であるので、また別の機会にご紹介させていただければ幸いである。

宗教的事象と人間の心的活動の関連だけで事足りるか？

—「人間の救済」を志向する宗教心理学の提案—

中尾将大(大阪大谷大学)

2014年9月11日に日本心理学会第78回大会公募シンポジウム「宗教性/スピリチュアリティと精神的健康との関連(2)―宗教が精神的健康に与える影響はいかなるものか―」が開催された。全く「有難い」ことだが、筆者に話題提供者として登壇の機会が与えられた。当日は筆者の予想に反し、シンポジウムには実に多くの先生方が参加されていた。これは、「嬉しい裏切り」であった。ここ数年の宗教心理に関する心理学者の関心は確実に高まってきており、この度のシンポジウムでも、その傾向を如実にあらわすこととなった。

筆者も含め、これまで、多くの心理学者は、宗教的事象にまつわる人間の内面の変化や心理的効果の解明に心血を注いできたように思う。当日、筆者は新たに実施予定の「日本人における写経行動の実験的研究」について、これまでの写経行動の研究で明らかにされたこと、およびこれから実施予定の具体的な実験計画について発

表した。しかし、振り返ってみると、筆者の発表に対するフロアからのご指摘や質問は、ほとんどが実験計画にまつわるものや技術的なことが多かったように思う。その他、宗教心理学の知見を臨床心理に生かすことの可能性を示唆する先生もおられた。

これらのご質問やご指摘、ご提案は心理学者の持つ関心としては至極当たり前で、いわば、「正統なもの」と言えるだろう。そして、とても大切な視点であることは疑いようのないことである。しかし、筆者は時間が経つにつれて、何かそれだけでは物足りない、少なくとも筆者が宗教心理学を志した目的はそのようなものではなかったはずだと感じていた。しかし、その時、筆者が感じた違和感の原因は何なのかは明確には見いだせないまま、大会終了後はずっと何か釈然としない違和感を引きずっていた。

筆者がこれまでの専門領域であった実験心理学から宗教心理学に研究の軸足を置き換えたの

には理由がある。当日の発表でも述べたが、直接の原因は「姉の死」であった。以来、筆者には愛する家族を失った悲しみと「なぜ？ どうして？」という人生の理不尽さに対する問い、そして、その後の生活状態の激変と苦勞など、いいようのない人生の苦しみをなんとか解決したいという願いがあった。そして、「なぜこれまで懸命に生きてきた自分にこのような苦難が生じたのか？」という自身に降りかかった苦難の意義を知りたいという強い願いもあったのである。それらの願いを叶えることは、自分が専門としてきた科学としての心理学だけでは難しかったのである。

筆者の苦しみと悲しみは未だ完全には癒えたとは言えないが、仏教、キリスト教との出会いと交流の中で少しずつではあるが、自身の心が癒され、慰められてきていることは最近になって感じ始めてきている。辛い経験も伴う人生だが、なんとか生きてゆこうという気力が少しずつではあるが湧いてきているのである。同時にこの世界に存在するもの、生起する事象にはきつと何か「隠された意味」があるに違いないとも思い始めている。

そのうちに自分は何故生まれ、苦しみもがきつつも今ここで生きているのか、という自分という人間の存在の意味をも問うようになってきた。当然のことながら、この問いにはまだ明快な解答を得ていない。現在も自問し、問題を解こうと努力と探求を重ねている最中である。経過報告をしておく、家族を亡くす前の自分は「自分のためだけに生きてきた」ように思うのだが、最近「自分ではない誰かの為に生きよう」としていると思う。家族や周囲の人々のために自分を捧げるという生き方に今の自分の存在価値を少しは見出している。世界から切り離された自己ではなく、世界の一部として機能している自己への転換とでも言えるだろう（一即多、多即一）。この点が筆者個人の「人生の意味」を見出す上で今後、大きなヒントを与えてくれるのではないかと確信を持っている。

では、そもそも宗教とは何か？ シンポジウム当日、宗教＝ナラティブ（物語）という話題があっ

た。筆者は、この視点は「世界観」とも置き換えられるのではないかと考え、的を射た視点だと思った。しかし、筆者が大会終了後に続けてきた思索の中で見出したことは、宗教とは人生における苦難・理不尽さに対する「癒し」と「慰め」そして苦難を乗り越えて「前に進む勇氣」を与えるものではないかということであった。さらに、人間の存在が肯定され、人間存在の意義が自覚されることを促すものではないだろうかと考えた。筆者はその営みを「人間の救済」と名づけたい。この救済のための具体的方法や法則を科学的に提案することが今後の心理学（特に宗教心理学）に求められることではないだろうか。このことから、今後の宗教心理学の究極の目的は人間が人生の苦しみから救われ、自分自身に宿る生命の価値に気がつくことを促す点にあるのではないか。これを筆者は「人間の救済を志向する宗教心理学」と名づけたい。

2010年に亡くなられた慶應義塾大学名誉教授で行動分析学の泰斗 故 佐藤方哉先生は次のような質問に対し、以下のように回答されたというエピソードを筆者は聞いたことがある。

A 先生：「先生はなぜ、行動分析学を研究されているのですか？」

佐藤先生：「そりや、君、世界を救う為だよ」。

佐藤先生はなんの躊躇もなく、間髪入れずに上記のように回答されたそうである。筆者は学部生時代にこのエピソードを聞いたのだが、「佐藤先生は学者の鏡でいらっしやる！」と強く感激を覚えたものである。残念なことに筆者は生前の佐藤先生に直接お会いしたこともお話をさせていただいたこともない。しかし、上記のエピソードから佐藤先生がどのようなお人柄でどのような学者でいらっしやっただかということは、十分に伝わってくるのである。

今後、宗教心理学がますます繁栄し、やがて「世界や人々を救うための学問領域」へと発展・成長することを願って、筆を置くことにする。

実証的研究への期待と可能性

平子泰弘(曹洞宗総合研究センター:非会員)

去る9月11日の日本心理学会第78回大会、公募シンポジウム「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連(2)―宗教が精神的健康に与える影響はいかなるものか―」において、指定討論者の一人を務めさせていただきました。

私は宗教者であり研究に携わる立場として、「宗教の力によって人々の精神的健康に大いに(少しでも)影響を与えていること」を心理学的方法論にて実証して欲しい!との思いを持って、関わらせていただいております。自身の専門分野は仏教学・宗教学ですので、如何に気の利いた意見を言えるか?不安もありましたが、宗教の現場で感じる空気も糧にさせていただき、思うところを述べさせていただきました。

当日も述べさせていただいた一つは、宗教による影響がどの時点で効果として現れるか?個人差が大きいこと、更にはその効果を宗教による影響として本人が自覚するのにもタイムラグや時差があること。そして、写経に見るような仏教的救いは、決して受け身的な救いではなく、実践を通して自身の心理が整わされていくものだと考えられること。

これらの指摘は仏教的特徴であり、日本人的な感覚なのかもしれません。背景には仏教の根本的な教えにあります。それは「この世は思い通りにならないもの(苦)であり、それぞれがそれを身を以て自覚し、実践しながら生きていく」ことを教えとしているからであります。そうした自覚を持って写経や坐禅などの実践を修し、さらに自覚ある生活を深めることもあろうし、さまざまな実践を通して、教えを理解し身に染み込ませていくこともあるでしょう。あるいはそうした自覚もないまま

実践を続けることで、結果的に迷いのない生き方ができることもあろうし、ある日突然、目から鱗が落ちることも考えられます。写経・坐禅・念仏・法要など何であろうと修することを重んじ、頭だけでの理解を嫌うのが仏教の教えであり、それが救済につながっていくといえるわけです。

そのような特質から考えると、仏教の教えが精神的健康に影響を与えているかどうかを計ることは、難しいことといえます。しかし、この研究は無理だと言っているのではなく、上記のような特徴を踏まえて、是非とも取り組んで欲しいと考えており、できるお手伝いをしていきたいと、シンポジウムを通してより一層感じた次第です。

実際に、ここ数年の日本における宗教を取り巻く状況を観察していると、宗教不要を論ずる声以上に、宗教による救いや癒しが求められているのではないかと感じます。自身のわずかな現場での経験の中でも、儀式・法要を通して精神的に立ち直っていかれる方を目の当たりにしています。特に東日本大震災以降、宗教による救いがさまざまな形で語られてきており、そこに宗教の効果を明らかにしていく可能性を感じています。

こうした精神的な効果を客観的に実証していくことは、これからの宗教界にとっても大変意味のあることです。本来、宗教界や各教団がこうした宗教の影響や効果、目的などを明らかにしなければならないはずですが、それが難しい現状があるからこそ、今回の研究に大きな期待を持っており、無力ながら何か一端を担えればと思う次第です。今後も関わっていきたいとの自覚を、学会という実践を通して更に深められた一日でした。

「日本心理学会第78回大会公募シンポジウム 宗教心理学的研究の展開(12)－宗教心理学とできること－」に参加して

森定美也子(和歌山信愛女子短期大学)

2014年9月10日から12日に同志社大学で開催された日本心理学会において、宗教心理学研究会の12回目となる公募シンポジウムが行われました。松島先生による宗教心理学研究会の概要の説明の後、様々な視点からの4つの発表が行われ、森岡正芳先生より指定討論をいただきました。

(1)精神保健福祉の臨床現場で宗教心理学とできること

まず最初に、栃木県立岡本台病院の岡田正彦先生による、アルコール依存症患者の集団精神療法、Alcoholics Anonymous (AA)についての発表がありました。AAとは、アメリカから世界に広がった飲酒問題を解決したいと願う相互援助の集まりです。AAの「12のステップ」、「12の伝統」には、神の存在といえるような、自分を越えた大きな力についての記述があります。例えば「自分を越えた大きな力が、私たちを健康な心に戻してくれると信じるようになった」、「祈りと黙想を通して、自分なりに理解した神との意識的な触れ合いを深め、神の意志を知ること、それを実践する力だけを求めた」というように、「神」に関する記述が見られます。このような精神保健福祉の臨床現場で、宗教心理学とできることは、アルコール依存症からの回復とスピリチュアリティ(AAにおける「ハイヤーパワー」を信じる能力)との相関性の探求が挙げられるということです。AAにこのような視点があると知り、大変興味深く思いました。ハイヤーパワーを信じる能力が高ければ、回復の手がかりがつかみやすくなるのでしょうか。AAについての理解を深めることができました。

(2)生命倫理から宗教心理学に期待すること、協働できること

安藤泰至先生により、臓器移植という問題を

通して、二つの例を挙げ、死に寄り添う議論についての発表が行われました。ドナー遺族である医師、杉本健郎氏は、事故で脳死になった6歳の息子の生きた証を残したいと臓器提供を行いました。その後、その決断は親の癒しでしかなかったのではと悩みます。日本の「脳死になったのだから、治療打ち切りは仕方がない」という押しつけられた医療の中で、ゆっくり死を受け入れるための時間ありませんでした。杉本医師は、十分に見取り、納得した上での臓器提供という決断でなければ、後悔することになりかねないと日本のシステムを批判しています。

また、ドナー患者を看取る経験をした看護師であるF氏は、人がこの世で生き切ろうとするのを看取ること、臓器提供に向けて様々な処置を行うことは、絶対的な断絶があると述べています。この相反する二つのことを行わなければならない葛藤を引き受ける姿勢が大切な視点となります。「医学も文化であるのに、苦悩に寄り添った議論が行われてこなかった。命への問いに開かれた議論が必要」というお話を伺い、臓器移植を通して生と死について深く考えさせられました。

(3)死生学から宗教心理学に期待すること、協働できること

松田茶茶先生により、死生学と教育という視点から、設立母体が宗教系ではない園の保育士、幼稚園教諭80名に行った調査をもとに発表が行われました。調査の結果、園児に「生」や「死」についての教育が必要だと思うと答えたのは、97.5%、一方、「生」や「死」に関する教育活動を実施するうえで、宗教的な行事や説明は有効だと思うと答えたのは56.3%であり、宗教に対する接近と回避が混在する独特のパターンを示していました。「保育園や幼稚園では、死については触れていないというが、実際には動植物の飼育などを通して触れている。命の教育を通して、子

どもにおける死に対する知識が必要」というお話には、今後の子供たちの命の教育の在り方について様々な示唆に富むものでした。

(4) 学術コミュニケーション(出版)から宗教心理学に期待すること、協働できること

上記の3つのそれぞれの分野からの発表をつなげるものとして、木村健氏による、特定非営利法人 ratik の設立趣旨について発表がありました。ratik は、人文・社会科学領域の専門書を電子書籍として出版を行っています。メジャーな研究コミュニティではない宗教心理学が、後進の育成から先端的探究までを含めて、どのように研究コミュニティを維持・発展させるのか、また、そのための学術コミュニケーションをいかに確保するのか、という視点をサポートする機関としての

ratik の意義が明示されました。今回のシンポジウムでは、AA、臓器移植、命の教育という、それぞれの領域に固有な方法論を超えて連携・協働するより広いコミュニティを示しているという木村氏の視点により、シンポジウムの様々な視点が包括的にまとめられました。

最後に、森岡正芳先生が、これらの発表を踏まえ、人に対する複眼的な眼差しの重要性、内省をどのように育てるか、人の死の線引き、教育のなかで生死の話題がタブーなのはなぜなのかという視点からお話をいただき、これまでの議論がさらに深められました。様々な視点から生きること、死ぬことについて深く考えさせられる貴重な時間を持つことができたシンポジウムとなりました。

日本心理学会第78回大会における宗教心理学研究会企画のシンポジウムに参加して

小泉晋一(共栄大学)

今年の日本心理学会の大会は同志社大学で開催されました。大会2日目の公募シンポジウム「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連(2)－宗教が精神的健康に与える影響はいかなるものか－」に参加しました。このシンポジウムで感じたことや考えたことを少し書かせていただきます。

まず酒井克也先生(出雲大社和貴講社)の指定討論でうかがった言葉が、今でも印象に残っています。それは、世の中には意味などないかもしれないが、我々は意味を求めている。その意味づけを行うのが宗教の役割であり、宗教はナラティブであるという言葉です。我々の人生は決して楽しいことや嬉しいことばかりではなく、つらいことや悲しいことも数多く起こります。2011年3月の東日本大震災では死者・行方不明者が2万人規模に上り、自然の猛威の前では人間がいかに無力であるかを思い知らされました。この震災を契機に、人生の意味、あるいは生きることの意義

を考えさせられた人も少なくなかったと思います。

海外では、新聞を広げれば毎日のように、世界のどこかで戦争やテロが起こり、多くの人が犠牲になっています。国内でも毎日、必ず誰かが事故や事件の被害に遭っています。我々はこういった災害や事件に遭遇した場合に、人生の不条理さや理不尽さを感じ、人生の意味や生きることの意義に対する何らかの説明を求めようになると考えられます。おそらく宗教は洋の東西を問わず、太古から人生の意味に対する解答や不幸な出来事に対する説明を提示して、我々に生きることの意義を持たせるための装置としても機能し、大きな役割を果たしてきたと思います。

このような視点で考えると、川島大輔先生(中京大学)の震災による喪失と宗教との関連についてのご報告は非常に興味深かったです。この研究では、阪神淡路大震災後から継続されている「ろうそく法要」の参加者にインタビューが行われました。そしてこの宗教的な営みは、喪われた

街や人を悼み、その記憶を維持するための文化的装置をとして機能していると考えられました。ここで大切なのは、この法要が参加した遺族一人ひとりのためのものでもありますが、それは地域のためのものでもあり、コミュニティレベルでの喪の作業をも担っていると考えられることです。

エレンベルガーは心理療法(特に力動的心理療法)の起源は太古の宗教にあり、現代の心理療法はその延長線上にあると論じています。精神分析をはじめとする心理療法は、近代になって宗教の役割を一部代替することが期待され発展したともいえます。確かに宗教も心理療法もクライエントのナラティブを支え促す点では共通していると思いますが、果たして心理療法が宗教ほどの機能を持つことができるのかということについて、私は臨床心理士として考えさせられました。例えば、臨床心理士も喪失体験のサポートを行います。果たして宗教家ほど十分な役割を担うことができるのかは疑問です。宗教のようにコミュニティに根付いたサポートは不得手であるかもしれません。もちろん両者を単純に比較するのではなく、両者の協同や役割分担を考える方が有益なかもしれませんが、わが国の臨床心理学の現状を考えますと、今後の発展のためには宗教との役割の異同等を検討することも無

意味ではないと思いました。

中尾将大先生(大阪大谷大学)の写経の心理的効果についてのご発表は、心理療法と宗教との接点を考えるうえでも有意義な研究であると思いました。先生は、寺院の持つ非日常的空間の役割が重要で、生活の場(日常的空間)と寺院(非日常的空間)との循環をとおして写経行動による心理的变化が生じるという一つのモデルを提示されました。心理療法でも面接室の構造は重視されますが、必ずしもそれは聖なる非日常的空間である必要はありません。両者のこの違いは決して小さくないと思います。また、この非日常的空間は個を超えた大いなる存在(例えば阿弥陀如来)と出会う場所でもあるので、寺院の持つ「場の力」だけではなく、個人の持つ信仰心の強さも心理的变化に大きな影響を与えているものと思われます。継続的な写経行動をとおして信仰心がどのように変容していくのかなど、いろいろと伺ってみたいことがたくさんあり、興味が尽きませんでした。

今年のシンポジウムも非常に有意義で、多くのことを学ばせていただきました。そして、よい刺激をたくさんいただくことができました。このシンポジウムにご登壇された先生方に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

これからの宗教心理学の可能性

武田正文(浄土真宗本願寺派高善寺 臨床心理士)

日本心理学会第78回大会二日目、この日は、宗教心理学づくりの1日でした。私は二つのシンポジウムと懇親会にフル参加させて頂きました。発表された先生方はもちろんフロアの方々の宗教心理学に対する熱気のようなものを肌で感じながら、これからの宗教心理学の可能性に思いを巡らせていました。

「宗教心理学的研究の展開(12)―宗教心理学とできること―」では、精神保健福祉、生命倫理、死生学、学術コミュニケーションという様々な立場からの宗教心理学へ期待すること、共同で

きることに話題提供がありました。様々な社会問題に向き合うなかで、宗教心理学に期待が寄せられていることが分かりました。こうしたお話をうかがっていると、社会問題に対して宗教家が向き合えなかったところに宗教心理学のニーズが高まっているようにも思いました。浄土真宗の僧侶である私としては、宗教家に対しても期待してもらいたいという複雑な気持ちにもなりました。しかし、浄土真宗のなかでも社会問題にいかにかアプローチするかという議論はよく行われますが、なかなか具体的な実践活動には結び付きに

くいというのが現状です。そう考えると、宗教家にとっても宗教心理学が様々な実践活動へのかけ橋になる可能性もあるといえます。ぜひぜひ、宗教心理学を中心とした協働の和が今後とも広がっていくことを願っております。

「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連(2)―宗教が精神的健康に与える影響はいかなるものか―」では2012年度より行われてきた研究プロジェクトの報告が行われました。私自身も浅学ながらプロジェクトに参加させていただいており、とても貴重な学びのご縁となっています。上記のシンポジウムで挙げたように様々な分野と協働していくためには、やはり宗教心理学におけるしっかりとした研究の積み重ねが重要となります。この研究が今後の展開につながっていくことを想像するとワクワクするような気持ちで参加させて頂きました。宗教や宗派の枠を超え、また、研究方法も様々なアプローチがなされています。こうした模索を通して、現代社会における宗教の役割が明確になっていくのでしょうか。この

研究の流れは今後もまだまだ続きますが、これからの可能性は大きいであろうことを感じております。

1日の最後に懇親会に参加させて頂きました。普段は、宗教心理学を研究している方や興味のある方とお会いする機会はありません。しかし、この懇親会には、本当に多様な視点から宗教心理学に目を向けている方々が全国から集まっておられました。シンポジウムのなかでは聞けないような本音の話なども聞けてとても刺激的でした。なかなか他の宗教、宗派の方と本音で話す機会は少ないのですが、この懇親会では不思議と心を開いてお話ができたように思います。これも宗教心理学が一つのかけ橋になっているのだろうかと考えながら美味しいお酒を頂き、宗教心理学づくしの1日が終わりました。以上、簡単ではございますが感想とさせていただきます。こうしたご縁の和が広がることを念じております。合掌

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 21 号が発行されました。今回の内容は、日本心理学会第 78 回大会公募シンポジウム(研究会企画, 科研費企画)の報告および発表者・参加者からの感想となっております。今号も非常に充実した内容となっており、ページ数も30頁とニューズレターとしてはずいぶん厚いものとなりました。

以前、ある会員の方から「宗教心理学研究会のニューズレターは読み応えがあるし、ずっと読めて良い」との言葉をいただきましたが、これからもそのようなニューズレターを作成できるように努めていきたいとの思いです。そのように進めていくためにも、これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2015年3月7日(土)

科学研究費補助金 基盤研究(B) 「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連—苦難への対処に関する実証的研究—」研究成果公開シンポジウム

時間: 14:00 ~ 18:00 会場: 東京大学駒場キャンパス 学際交流ホール

2015年3月下旬

宗教心理学研究会ニューズレター第 22 号『特集:臨床現場と宗教心理学』刊行予定

2015年4月

関西地区勉強会『雑誌会』 紹介者: 中尾将大(大阪大谷大学)

2015年5月

第 6 回勉強会 報告者: 酒井克也(出雲大社和貴講社)

2015年9月22日(火)~24日(木)

日本心理学会第 79 回大会公募シンポジウム(第 13 回研究発表会)開催

会場: 名古屋国際会議場

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望 [psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページ管理・運営

担当: 横井桃子 [psych.religion.web@gmail.com]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/